

# 唯物史観における生の生産および再生産について(中)

——南 亮三郎先生に捧ぐ——

別 府 芳 雄

## IV. エンゲルスの先行性

### I] エンゲルスの歩み

筆者はすでに『研究論集』(第17・18合併号。1980)において、エンゲルスの先行性を述べたことがある。若い頃のエンゲルスは、けっして〈第2ヴァイオリン〉ではなかった。カウツキー(Kautsky)はハッキリと「年少の友エンゲルスは、経済理論の領域でも、年長の友であるマルクスに先んじていた(vorangegangen war)のに、マルクスの影に隠され(überschatten)てしまっている<sup>1)</sup>」のだ、といい、「政治経済学の領域でも、エンゲルスは、実際に資本主義的生産過程(praktisch im kapitalistischen Produktions-prozess)のまっただ中にいたかぎりでは、マルクスを凌駕<sup>2)</sup>していたのだし——なるほど「マルクスの普遍的教養は信じられないくらい(fabelhaft)該博であったが、エンゲルスは、それ以上に想像力にとみ、その知的関心はさらに普遍的であった。マルクスは批判的で思慮深かった。そのかわり仕事ぶりはエンゲルスより、ゆっくりして、きびしかったが、エンゲルスの方は楽々と(mit grösster Leichtigkeit)やってのけた<sup>3)</sup>」くらいだったと証言している。メーリングはマルクスとエンゲルスが「友情を結んだはじめ(in den Anfängen ihrer Freundschaft)では、エンゲルスの方が受けるより与えた(mehr gegeben als empfangen hat)<sup>4)</sup>」人物であったと述べているし、じじつ「マルクスは理論的諸問題に(in theoretischen Fragen)においても、エンゲルスに助言(Rat)を仰いだ<sup>5)</sup>」と

確言しているくらいである。——だから「エンゲルスの寄与は、黙って見すごすことも、副次的な面にのけておくこともできない。とくに経済的事実の重要性 (*sur l'importance des faits économiques*) やプロレタリアートの現状 (*sur la situation du prolétariats*) にたいするマルクスの注意を喚(よ)び起したのはエンゲルス<sup>6)</sup>」なのだから、エンゲルスの方が、マルクスを先導するくらい先行していたことは間違いのない事実である。(賢明なる読者は、すでに「マルクス口述、エンゲルス筆記」説の誤りであることを見破っておられるであろう)。1846年までの時点で「第1ヴァイオリン」を弾いていたのは、むしろエンゲルスであり——エンゲルスはマルクスを先導してはいたが——マルクスの〈弟子〉ではなかったから「マルクス口述、エンゲルス筆記説」は、たんなる憶説にすぎないものと考えられる。小論の主題である「唯物史観における生の生産および再生産」を説明するために——前回の「若きエンゲルス」(『研究論集』第17・18合併号)と重複する点があるが、——もういちど、唯物史観形成までのエンゲルスの歩みを紹介し、「唯物史観の創始者はマルクスというよりも、むしろエンゲルスであること」<sup>7)</sup>さらに「ありていに言えば、マルクスの方がいかに甚しく立ち後(おく)れていたか、また唯物史観は主として専らエンゲルスの創見によるものであって、マルクスはむしろエンゲルスに学んだのだ<sup>8)</sup>」という広松氏説の分析をこころみ、主題の「唯物史観における生の生産および再生産」にかんしては——エンゲルスの立場から——『ドイツ・イデオロギー』執筆までの経過を紹介しつつ、エンゲルスの成熟と発展と開眼<sup>がん</sup>はいかにして可能であったかを分析して述べていくことにしよう。また「マルクス口述、エンゲルス筆記説」の真偽にかんしては、小論のうちに、ご理解いただけるものと確信して述べる。

まず『ドイツ・イデオロギー』(唯物史観誕生の書)が描かれるまでの若きエンゲルスの修業、研鑽、努力の歩みから追跡して、エンゲルスの先導性(=先行性)について述べよう。(紙幅の関係上、「マンチェスター時

代」から述べることにする)。

a) [マンチェスター時代 42 / 11 ~ 44 / 8]

1842年11月、エンゲルスはイギリスの土地を踏んだ。エンゲルスにとって21ヶ月の在英期間は、マルクスにとってのパリの1ヶ年余がもつと同じ意味をもつものであった。というのは、2人とも青年ヘーゲル学派として出発し、外国で同じ結論に達したという意味でそういえる。つまり「マルクスは時代の闘争と時代の願望 (die Kämpfe und Wünsche der Zeit) をフランス革命によって了解したが、エンゲルスはイギリス産業 (englische Industrie) によって了解」したからである。つまりエンゲルスにとって、イギリスでの生活はまったく感動的なものだった。産業革命後のイギリスは彼に「資本主義の支配的な、完全に展開した姿」 (die Welt des herrschenden und vollentfalteten Kapitalismus) を示していた。すでに「イギリスは資本主義の母国 (Mutterland), 世界の銀行家 (der Banker der Welt), 世界の工場 (industrielle Werkstatt) であった。同国 (イギリス) は社会発展のうえでドイツに一時代まるまる (eine ganze Epoche) 先んじていた<sup>10)</sup>」という状態だったからである。だからエンゲルスはハッキリと述べている——「私がマンチェスターにいるあいだにみとめざるをえなかったのは (in Manchester mit der Nase darauf gestossen worden) ——経済的事実 (die ökonomische Tatsachen) は、これまでの歴史の叙述 (bisherige Geschichtschreibung) では、なんの役割をも演じていなかったか、あるいはただいかにたらない役割 (nur eine verachtete Rolle) を演じていたにすぎないが、すくなくとも近代世界においては決定的な歴史的力 (eine entscheidende geschichtliche Macht) であるということ、この経済的事実が今日の階級対立 (Klassengegensätze) のおこる基礎であること、大工業のおかげで、これらの階級対立が十分に発達した国々、したがって、とくにイギリスでは、その階級対立はさらにすすんで政党の形成 (politische Parteibildung), 党派闘争 (Parteikämpfe) の基礎であり、か

くしてまた全政治史 (gesamte politische Geschichte) の基礎<sup>11)</sup>になってい  
る」のだと。

しかし、それだけに、イギリスでは新しいブルジョア社会の矛盾がムキ出しに露呈されていた。「資本主義的生産の規模 (das Ausmass der kapitalistischen Produktion) と階級間の闘争の激しさ (die Heftigkeit der Kämpfe) は、彼をひどく驚かせた。ドイツとはまったく別な関係 (ganz andere Verhältnisse)<sup>12)</sup> が支配していた」こともエンゲルスには驚異だった。つまり「資本主義の母国イギリスにおいて、その資本家的生産方法の運営は、そのとき、もうだいたい経済学的・哲学的に鋭くなっていた彼の眼に留らずにはいなかった。ほかの如何なる場所においてよりも明白に、彼はここで、プロレタリア階級の状態、その悲惨とその歴史的将来とを知ることをえた。彼のプロレタリア階級に対するインタレストはだんだんに強<sup>13)</sup>く」<sup>14)</sup>なっていく。「機械が、一部門、一部門と道具に打ち勝っている。機械は、それに仕えるための労働者の数が不断に増大するように要求する。生産諸用具を保持する人びととそれを操作する人びと、労働せずに所有する人びとと所有せずに労働する人びと、資本家とプロレタリアとのあいだに離反が起る」——若きエンゲルスはハッキリとこの現状を直視した。さらにエンゲルスは、階級闘争のために、イギリス労働者たちが結集しているのをみた。しかも「1824年には、労働者たちは労働組合、すなわちトレード・ユニオンの正式の承認 (die offizielle Anerkennung) をブルジョアジーから奪取」しており、しかも、これらの闘争の「先頭に立っていたのは、チャーティストたち (die Chartisten)<sup>15)</sup>」であった。彼は、そこから——「こう考えるようになった。イギリスは意識的な運動の成果ではないようなひとつの革命へむかいつつある。その革命は、それを方向づけ、しつけ、導くことが必要な自然力として、プロレタリアートの深部から湧き出るであろう<sup>16)</sup>」と。

エンゲルスは、マンチェスターにおいては、父が共同で所有していた

唯物史観における生の生産および再生産について(中)

〈エルメン・エンゲルス商会〉のマンチェスター綿紡績工場ヴィクトリア・ミル (Victoria Mill) の帳場で働くことになるのだが——このマンチェスターこそ、チャーティスト運動の中心地でもあった。そこで彼は「マンチェスターで、はじめて、たたかう工業プロレタリアート (das kämpfende Industrieproletariat) にめぐりあ<sup>17)</sup>った」ことになる。

エンゲルスは「空想的社会主義者 (utopische Sozialisten) やチャーティストたち、また彼らの正式の機関紙『ザ・ニュー・モラルワールド』 (The New Moral World) や『ザ・ノーザン・スター』 (The Northern Star) と密接な関係をむすんだ。チャーティストの『ノーザン・スター』の指導者ジュリアン・ハーニー (Julian Harney) とは個人的に知り合い (persönlich bekannt) <sup>18)</sup>」になったばかりか、この時以来、生涯にわたる友人の間柄になっていく。だから、ジョージ・ジュリアン・ハーニー (George Julian Harney) は、当時の22才のエンゲルスを追想して次のように述べている——エンゲルスがブラッドフォード (Bradford) からリーズ (Leeds) にやってきて『ノーザン・スター』紙の事務所 (Büro des Northern Star) に私を訪ねてくれたのは、1843年のことだった。ずっと後年のエンゲルスは「国際社会主義のネストル (Nestor 長老) だったが……彼はひとにたよられる助言者 (der vertraute Ratgeber) で……かくも献身的な友人をもったこと (einen so ergebenen Freund zu haben) は『資本論』の著者 (マルクス) にとって格別の幸運 (ausserordentliches Glück) <sup>19)</sup>」だった」と思うと若き日のエンゲルスを追想して述べている。

すでに述べたように、エンゲルスはイギリス資本主義の現状に鋭い観察の目を向け、1842年12月10日付、第344号掲載の『ライン新聞』において、以下のように書いている。「しかし上述のようなイギリスの状態からすれば、近いうちに、かならずや、プロレタリアの全面的な失業 (eine allgemeine Brotlosigkeit der Proletarier) が生じるであろうし、そのときには法律にたいするおそれよりも、餓死にたいするおそれ (die Scheu

von dem Hungertode) のほうが強くなるであろう。この革命はイギリスにとっては避けがたい (unausbleiblich)。しかしイギリスでおこることのすべての場合のように、主義 (Prinzipen) でなくて、利害関係 (Interessen) から、はじめて主義が発展しうるのだ。すなわち革命は政治革命 (politische) でなく、社会革命 (soziale) であるだろう<sup>20)</sup>」と。だからエンゲルスとしては「共産主義というものが決してユートピアではないこと、それはイギリスやフランスだけの問題ではなく、ドイツにとっても切実な課題であること、それが歴史的必然であること<sup>21)</sup>」を何とか論証してみせる必要を覚えるのは当然であろう。この要請に答えようとする努力——その「努力のなかから唯物史観を確立する方向」に進んでいったものと考えられる。こう考えてみると、エンゲルスの主張は「同じころの『ライン新聞』時代のマルクスと比較してみると、少くとも資本主義の現実認識にかんするかぎり、かなり先を<sup>22)</sup>あゆんでいた」ことは確かである。

エンゲルスは、この頃、イギリスやフランスの空想的社会主義者、ロバート・オーエン (Robert Owen)、シャルル・フーリエ (Charles Fourier) やサン・シモン (Saint-Simon) の著作も読み、さらにイギリス古典派経済学の研究を始め、1843年末には、ブルジョア社会の経済的構造を社会主義の視点から批判した論文「国民経済学批判大綱」 (Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie) を執筆する。この論文でエンゲルスは「ブルジョア経済学、すなわち私的所有のためののみ存在している〈完結した致富学〉 (komplette Bereicherungswissenschaft) を<sup>23)</sup>鋭く」攻撃する (エンゲルス 23才)。この論文は1844年2月公刊の『独仏年誌』に投稿されるため、編集者のマルクスのもとに送られる。この論文を読んで、マルクスは強烈な衝撃をうける。というのは、マルクスのノート・ブックに長い抜き書きがあることから十分に証明できる。このエンゲルスの論文は始めてマルクスに「資本と労働が経済生活の対立的ではあるが相互補完的な範疇であることを教えた。それは、彼が最近探し求めていたところの、経

唯物史観における生の生産および再生産について(中)

経済学の混沌たる宝庫に入る鍵を与えた。またそれは、この科学が革命の哲学において如何なる役割を果し得るか、を明らかにしてくれた<sup>24)</sup> という意味でマルクスに与えた深甚な影響をみ落してはならない。ルイ・アルチュセル (Louis Althusser) などは、当時のマルクスに与えた深甚な影響 (*une très profonde influence*) という点からみると「この論文のもつ重要性は過少評価 (*sous-estimer*) されている」とさえ断言している。だが深甚な影響といっても——広松氏によると、それは「マルクスにとっては、所詮 (しょせん) は、外的な機縁以上のもではなく、マルクス自身の内部に、心理学的のいわゆる *readiness* (準備状態) が形成されていたことをこそ重視すべきであろう」し、そもそも『経・哲手稿』執筆当時の——この頃のマルクスにとっては「いうまでもなく、ここでの“経済学”がまだ、きわめて未熟であり、しかもマルクスの思想というよりも、殆んどが諸々 (もろもろ) の経済学書からの引用からなっているという意味において<sup>25)</sup> そういえるのだ、という。つまり2才年下のエンゲルスの論文がマルクスに与えた深甚なる影響 (マルクスの経済学的知識の未熟さの自覚を促した点) を痛切に考えてみる必要があるという。この論文、つまり1843年の末から44年正月にかけて執筆したと思われる「国民経済学批判大綱」は「それが資本主義的生産の社会的性格をふまえて、〔共産主義社会の〕必然的であることの論証に欠ける〔ものがある〕。しかし、この『大綱』がマルクスの経済学批判の仕事に対してもった先駆的意義のほかにも、たとえば、のちの唯物史観において中軸的位置をしめる〈生産力 *produktionskraft*〉概念をマルサス (R. Malthus) 批判のうちから、つかみとっていることなどは、みおとすことのできない点<sup>26)</sup>」であるばかりか、「エンゲルスは、国民経済学が〈私的所有の諸法則を展開する〉にとどまり、自己の前提である〈私的所有の正当性を疑ってみようとしめない (*die Ökonomie liess sich nicht einfallen, nach der Berechtigung des Privateigentums zu fragen*)〉こと、この意味で学的な基礎づけを欠いて

いるという後（のち）にマルクスに継承される論点を確保し、さらにはイデオロギー批判の萌芽を示し<sup>27)</sup>ている点などはエンゲルスの先行性を示すものである。繰り返していうと、マルクスが『経・哲手稿』の序文で——国民経済学は私有財産（私的所有）を始めから前提してしまっていて、少しもそれを解明しようとはしないと批判しているが——これと全く同一の論旨はすでに「エンゲルスの〈国民経済学批判大綱〉にもみられる論点である。『経・哲手稿』序文での〔マルクスの〕エンゲルスへの言及などから考えれば、この批判はエンゲルスの示唆をうけたもの<sup>28)</sup>とみて間違いないといえよう。さらにまた、「エンゲルスは1843年、彼が22才の頃には、はっきりと共産主義に賛成の立場をとっており、ひとかど（一廉）の共産主義者として発言している。一方、2才年上のマルクスは44年の或る時期、見方によっては45年にいたるまで、共産主義に対して懐疑的な態度をとっており、エンゲルスの早熟ぶりには瞠目すべきものがある<sup>29)</sup>」といえる。もう一つの論文『イギリスの状態・トマス・カーライル「過去と現在」ロンドン・1843年』（Die Lage Englands, „Past and Present” by Thomas Carlyle, London, 1843）も1844年2月、『独仏年誌』に掲載されたが、この論文でエンゲルスが「労働者だけがイギリスを救う力」をもつものとして「イギリスを救う力は、彼らのなかからでてくる（von ihnen geht die Rettung Englands aus）点を指摘している点に注目しよう。というのは、エンゲルスが「この書評（review）によって注意を喚起した、すべての人間関係が〈現金関係“the cash-nexus”〉に還元される事実のカーライルによる峻烈な告発（Carlyle’s fierce denunciation）<sup>30)</sup>」をおこない、この時期のマルクスに「経済の重要さを教え、決定的な戦いがおこなわれるのは、どの戦場であるかを示したのはエンゲルスであり、こうして彼はマルクスが産業界の生きた諸現実を知るのを援助した<sup>31)</sup>」からである。

まさしく『独仏年誌』におけるエンゲルスの諸論文は「哲学的な点で



唯物史観における生の生産および再生産について(中)

も、経済的、政治的な点でも、エンゲルスの世界観の発展 (seine weltanschauliche Entwicklung) に新紀元 (neue Etappe) が開始<sup>32)</sup>されたことを意味するものであり、マルクスに先んじて、彼の世界観の紀元の開始を告げるものである。とくに「イギリスの労働者だけが、イギリスを救う力をもつ」という「プロレタリアートの歴史的役割 (historische Rolle des Proletariats) にかんするエンゲルスのテーゼ (命題) は天才的発見 (eine geniale Entdeckung)<sup>33)</sup>」と呼ぶにふさわしいものであって——なによりも決定的な点は、この時期のエンゲルスがすでに「プロレタリアートの現実闘争 (der wirkliche Kampf des Proletariats)こそが社会主義への唯一の可能な移行手段〔となる〕 (der einzig mögliche Weg zum Sozialismus sein wird) という理解にまで、すでにたちいたっていることである。この意味でそれは、エンゲルスが空想的社会主義と最終的に訣別 (Engels' endgültigen Bruch) したことを示す<sup>34)</sup>」ものであるのみならず、エンゲルスの先行性を示していると考えべきであろう。

1844年2月、論文『イギリスの状態、18世紀』 (Die Lage Englands, Das achtzehnte Jahrhundert) を執筆 (8月31日から9月1日まで『フオアヴェルツ』 (Vorwärts!) 誌に掲載)、1844年3月、論文『イギリスの状態、イギリス憲法』 (Die Lage Englands. Die englische Konstitution) を執筆 (9月18日から10月19日まで『フオアヴェルツ』 (Vorwärts!) 誌に掲載)——ことに後者の論文では「単なる民主主義には社会的害悪をただす力はない (die blosse Demokratie ist nicht fähig, soziale Übel zu heilen)。民主主義的平等は一つの幻想 (eine Chimäre) であり……そこから、ただちに一つの新しい要素……—原理が発展してくるにちがいない。この原理とは社会主義の原理 (Dies Prinzip ist das des Sozialismus) である<sup>35)</sup>」と断言している。

前者の論文「イギリスの状態——18世紀」では、イギリスの先進性を承認し、イギリス社会における社会的害悪、つまりくイギリス労働者階級

の貧困と窮乏〉に「世界史的な意義」を認めている。つまりエンゲルスが「今日のイギリスの労働者階級の窮乏と貧困 (das Elend und die Armut der arbeitenden Klasse des heutigen Englands) は、国民的な意義、それどころか、世界史的な意義 (weltgeschichtliche Bedeutung) をもつ」ものとして、イギリスの先進性を確認してから——事実認識 (状況認識) の域をこえて、唯物史観への重要な一步をすすめていることである。この点について細谷氏は「このようなイギリスの先進性をもたらした要因は〈イギリス工業の革命化〉 (Revolutionierung der englischen Industrie) にあり、それこそが〈近代イギリスのすべての諸関係の土台 (die Basis) であり、社会的運動全体の推進力である〉。ここで産業革命 (industrielle Revolution) という用語をつかって叙述されたイギリス経済史の概観は、このころのエンゲルスの研究が、この方面でも、なみなみならぬものがあったことを示し<sup>36)</sup>」ているのみならず、さらに「階級社会の非人間性の頂点として近代をつかむ、いわば、階級社会貫通的視点と先の『大綱』における〈財産共同社会〉にもとづく共同生活、競争にもとづく近代社会、そして共産主義という、いわば3段階論点視点との間には、整合性の問題が残るといえようが、これらはともに後の『ドイツ・イデオロギー』に流れこみ、マルクスの思想と交錯して、唯物史観形成に重要な役割をはたすことになる<sup>37)</sup>」のであると解説している。

こうして「この時期のエンゲルスにおいて、〈政治〉や〈哲学〉に対して (社会) が基礎 (=土台) であるとの認識、あるいは、ブルジョア革命とプロレタリア革命との段階的な範疇的区別の把握、そのような唯物史観の基本命題が、あるいは少なくとも、そこにいたる素材的な認識が、イギリス、フランス、ドイツの同格的な対比的把握から、イギリスの先進性の承認にいたる過程で準備されてきているとみる事ができる<sup>38)</sup>」し、またエンゲルスがイギリスの先進性——「資本主義の普遍化的作用の根源を、産業革命をつうじて形成された〔イギリスの〕大工業にみいだしていることに

<sup>39)</sup>注意」すべきだと述べている。

b) [第2回目の会見 44 / 8]

1844年8月末、エンゲルスはイギリスを去る。ドイツへの帰途、彼はパリにマルクスを訪ねた。こうして「第2回目の会見」(das Zweite Zusammentreffen)がおこなわれた。『独仏年誌』への寄稿以来、エンゲルスはマルクスと文通していたからである。エンゲルスがパリに到着したとき「マルクスはちょうど彼の『手稿』の執筆をはじめていた」ところだった。2人の間に思想と行動の上で共感が湧き出て、エンゲルスは約10日間(8月28日から9月6日ごろまで)パリに留った。彼らのあいだに死ぬまで続く「友情の絆」(Freundschaftsbund)が生れたのは、この時以来のことである。だが考えてみると「ヘスの影響のもとに2年前から共産主義者になっていたエンゲルスと同じくヘスの影響下に立ったマルクスとが多くの点で驚くほど意見が一致し、意気投合したのも、あやしむに足りない。エンゲルスが立ち去ったあと、マルクスはエンゲルスの書きのこした原稿に大幅な増補を加え、『神聖家族』に仕上げ<sup>40)</sup>ていく。だが会見そのものについていえば、エンゲルスの目からみると「マルクスの疎外論的発想」には違和感が残ったに違いない。もっと「大胆な推測をくだせば、パリでマルクスと会った時に交わした経済学方面での対話から、エンゲルスは、マルクスがいかにも経済学の初心者だという印象を得た<sup>41)</sup>」ことであろう。ともあれ「マルクスは……2つ年下のエンゲルス(zwei Jahre jüngere Engels)がイギリス経済の理論と実際の研究(das Studium der englischen Wirtschaftstheorie und-praxis)で、どれだけ先を行っていたか(Wieviel weiter gelangt war)<sup>42)</sup>を知った」のであり——「思い知らされた」のであり、エンゲルスの先行性はきわめて明瞭である。だから、この会見でエンゲルスにとってみるとマルクスから受けた影響の「痕跡を嗅ぎ出すことすら困難」なくらいに少い。それにくらべて「マルクスはこの会見を転機として、大きく旋回しはじめる。最初の共著『神聖家族』

(Die Heilige Familie) には、早くもそれが現われ<sup>43)</sup>てくる。

このエンゲルスとの会見ののち、「マルクスは、いまや経済学にひきいれられ、彼の研究の中心点は、資本主義の経済的諸関係の分析 (die Analyse der ökonomischen Verhältnisse des Kapitalismus) に<sup>44)</sup>」移っていくことになる。つまりエンゲルスのほうがすでに「先進的な産業経済の様相をマルクスに教えることのできる見識をもつ人物<sup>45)</sup>」になっていたということがわかる。

こうしてマルクスはエンゲルスという戦友 (gleichgesinnter Kampfgefährte) と廻り合い、彼らの学識によって、相互に刺激しあい、助長しあうことができた。しかも理論的に基本的な点では意見が一致していることを確認した。エンゲルスはまだパリに滞在しているうちに——「マルクスがちょうど執筆中の論争書 (Streitschrift) に協力論文 (Beitrag) を<sup>46)</sup>」書く。題して『神聖家族、別名、批判的批判の批判、ブルーノ・バウアーとその伴侶を駁す』 (Die heilige Familie oder Kritik der kritischen Kritik. Gegen Bruno Bauer und Konsorten) という。エンゲルスの協力論文 (Engels' Beitrag) はわずか1ボーゲン半だったのに、マルクスは20ボーゲンに引きのばして、題名を『神聖家族』として、1845年2月、フランクフルト・アム・マイン (Frankfurt am Main) で刊行される。この『神聖家族』の評判はユンクなど少数の人びとの賞讃をうけたが、一般の評判はそんなに芳ばしいものではなかった。しかし、この『神聖家族』は「マルクス＝エンゲルスにおける弁証法的唯物論の成立過程において最も重要な道標のひとつである。第1に、ここにおけるマルクス＝エンゲルスの批判の仕方である。彼らは、ブルーノ・バウアーらの哲学的空言に対して、つねに事実の実証をもって批判している。たとえば、フランス革命にかんしては、正確なる革命の歴史をもって、イギリス産業にかんしては、またこれの詳密な事実認識をもって。このことは重要でなければならぬ。なぜなら、ここでマルクス＝エンゲルスは、哲学的瞑想を

唯物史観における生の生産および再生産について(中)  
もって事実説明の間隙を補なおうとする観念論的な仕方と鋭く対立し始めているから。事実説明には、どこまでも事実の忠実な科学的究明をもってする。そのかぎりにおいて、唯物論的な態度にしたがっているからである。そればかりでない。マルクス＝エンゲルスは『神聖家族』において、社会の諸事象を明らかにするためには、産業の状態、物質的生活条件の生産、物質的欲望の充足の過程における人間の諸関係を知ることが必要であることを認め説いている。この思想は展開せられて史的唯物論(＝唯物史観)となる<sup>47)</sup>ものであると大森氏は述べている。ただしブルーノ本人からの正式な応答もなく、『神聖家族』は率直に言えば、「全体がうまく構成されていないうえ、一定のプランもなく散漫で重苦しい」作品(ルフェーヴル)でもあった。

c) [再びバルメンへ 44 / 9 ~ 45 / 4]

1844年9月初旬、エンゲルスはバルメンに帰った。バルメン到着以来『イギリスにおける労働者階級の状態』(Die Lage der arbeitenden Klasse in England)の執筆を始めた。本書は1845年5月末に、オットー・ヴィガント書店(Verlag von Otto Wiegand)から出版される——本書において彼は、政府の《青書》(ブルーブック)からイギリスの労働条件の完膚なきまでの非難を引き出すというやりかた——マルクスは『資本論』の中で非常に能率的にこれをまねたのだが——のお手本を示した<sup>48)</sup>。だからエンゲルスは『イギリスにおける労働者階級の状態』の序文で「私は21ヶ月のあいだ、イギリスのプロレタリアートと彼らの努力(Bestrebungen)、彼らの苦惱(Leiden)や喜び(Freude)を、個人的な観察や個人的な交際をつうじて身近に学びとり、同時に、必要な、確実な文献を利用(Gebrauch der nötigen authentischen Quellen)して、私の観察を補足する機会をもった。私が見たり、聞いたり、読んだりしたこと(Was ich gesehen, gehört und gelesen habe)は本書のなかに、とり入れられている<sup>49)</sup>」と明記している。つまりエンゲルスのイギリスでの体験こそが『イ

ギリスにおける労働者階級の状態』執筆への動機となったものである。本書でエンゲルスは「イギリスのプロレタリアートがブルジョアジーと和解しがたく対立していること (in einem unversöhnlichen Gegensatz zum Bourgeoisie steht) を巨細にわたって証明した。ブルジョアジーの利害 (die Interessen der Bourgeoisie) と、労働者の利害とは、正反対 (diametral entgegengesetzt) であると彼は明言した。彼は両階級のあいだの闘争が必然 (die Notwendigkeit des Kampfes) であることを、くわしく解明し、プロレタリアートが、この闘争を行うのは、完全に根拠のあること (vollständig berechtigt ist) であることを立証した。階級闘争は、資本主義社会の法則にのっとったもの (Gesetzmässigkeit) であり、ブルジョアジーに対立するプロレタリアートの抵抗と格闘 (der Widerstand und das Ringen) は真に人道的 (wahrhaft humanisch) なものである<sup>50)</sup>」ことを立証している。本書について——カウツキーは「労働運動と社会主義の統一が近世の科学的社会主義の本領」であるとすれば——本書においてこそ、「この必然が初めて明確にいいあらわされたもの」と述べ、かつ本書が高い価値をもつ理由は、エンゲルスが「貧困のなかに、それが胎内にいたいているところの一段高い社会形態への萌芽を認めた〔こと〕である。当時、世人がまだ労働者階級の苦痛を知らないでいるか、知っていても、それをかこつ〔原文漢字〕ばかりであって、それを歴史的発展の一齣 (こま) として、研究などはしなかった時に当って、24才の青年エンゲルスが一巻の書をもってなした功績が、いかばかり大きいものであったか、今日のわれわれのように、近世社会主義の思想的雰囲気のうち成長したものの到底想像することのできぬこと<sup>51)</sup>」であると述べている。本書の歴史的に重要な特徴は——「この24才の著者が資本主義的生産様式の活力 (Geist der kapitalistischen Produktionsweise) をつかみ、そこから、ブルジョアジーの興隆だけでなく滅亡 (Verfall der Bourgeoisie) を、プロレタリアートの窮乏だけでなく救済 (Rettung des Proletariats) を、解説し

唯物史観における生の生産および再生産について(中)

えたその鋭さ (die Schärfe) である。大工業は非人間化された、知的にも道徳的にも獣性にまで品格をおとされた (zur Bestialität herabgewürdigt) 肉体的に破壊された種族である近代労働者階級を、いかに創出するか。しかも近代労働者階級は歴史的弁証法 (historische Dialektik) ——その諸法は仔細にしめされている——の力によって、いかにして彼らの創出者をうち倒す (zum Sturze) までに発展するか、また発展せざるをえないか——これをしめすことが、この書の核心 (der Kern der Schrift) だった。この書は、労働運動と社会主義が一つになるとき、はじめてプロレタリアートはイギリスを支配するとみた<sup>52)</sup> 点に特徴がある。だからフリードリヒ・レスナー (Friedrich Lessner) などは、この『イギリスにおける労働者階級の状態』を読んで始めて——「私はこれによって、はじめて労働運動の何たるかを知った」 (aus dem ich zuerst einen Einblick in die Arbeiterbewegung bekam)<sup>53)</sup> とさえ述べているくらいである。

本書のなかでエンゲルスは「まず、労資の利害は〈まったく正反対〉のものであると基本点をおさえたうえで、〈労働者階級の状態が現代の一切の社会運動の事実上の基礎であり出発点〉であり、また、大工業のうみだした大都市こそが労働運動の、したがって、また社会主義や共産主義の〈発生地〉であるとの認識を示している。これはすでに、ドイツ的な〈哲学的〉共産主義の域をはるかにこえた水準にあり、イギリスの現実がエンゲルスにあたえた世界史的認識<sup>54)</sup>」であり、エンゲルスの「社会主義を基礎づけるもの」 (eine sozialistische Grundlegung) として評価されるに値するものであったことを確認しうるとともに、同時に、エンゲルスがマルクスを数段、凌駕した先行性を示すものである。

だが、このばあい、エンゲルスのいう共産主義像は——「それがなお資本主義的生産の社会的性格をふまえて、必然的なものとして論証されていないかぎりにおいて、資本主義の否定面のうらがえしとしての理想像」にすぎずとして——細谷氏は「したがって、いぜん目的論的な発展の弁証法の

思考線上にあるといわなければならない。こうして、この時期までにイギリス資本主義の現実からつみとられたゆたかな認識は、唯物史観の素地を十分に準備しながら、もう一步のところ、そこへの到達についてはかた<sup>55)</sup>りえない」段階にきていたと思われると述べている。

1844年押し詰ってからシュティルナーの『唯一者とその所有』(Der Einzige und sein Eigenthum)が公刊される。オットー・ヴィガントから送られた見本刷りを読んだエンゲルスは11月19日、マルクスあてに手紙を書く。そのなかで、エンゲルスはシュティルナーの利己主義が「現存の愚論 (bestehende Dummheit) のなかでのすべての理論の頂点 (die Spitze aller Theorie) であること」それだからこそ「このものは重要 (Darum ist das Ding aber wichtig) なのであり」「原理として真実な点は、われわれも受け入れなければならない (Aber was an dem Prinzip wahr ist, müssen wir aufnehmen)<sup>56)</sup>」と注意を促している。また同時にエンゲルスは、この手紙のなかで、フォイエルバッハやヘスに対する批判を書き、「ヘスが理論的なこと (auf theoretische Dinge) をいう段になると、きまって範疇 (Kategorien) がまっ先に出てくるので、そのため彼は通俗的 (populär) に書くこともできない、というのは、彼はあまりに抽象的にすぎる (viel zu abstrakt) からです……それにしても、こんな〔ヘスのような〕空論的な饒舌 (dies Geträtsch = むだ口) はますます僕を退屈<sup>57)</sup>させる」ばかりだとも書いている。(エンゲルスは早くも、ヘスの批判を始めている点に注意)。

このエンゲルスの手紙に対するマルクスの返書は残っていないが……マルクスはしばらくのあいだ逡巡していたようであったが、結局は——広松氏の報告によると「この手紙でエンゲルスの打ち出した思想が——というよりも44年を通じてエンゲルスの向ってきた方向が、やがて両人の共通の路線<sup>58)</sup>」になっていく。というのは1844年11月から45年春にかけて、エンゲルスがまず、フォイエルバッハ批判にかわり、次いで、追いかける



唯物史観における生の生産および再生産について(中)

ように、マルクスがフォイエルバッハ批判に転じていくことになる。してみると、ここでもまたエンゲルスがマルクスに先行していたことがわかる。

d) [ブリュッセル時代のはじめ 45 / 4 ~ 46 / 8]

1845年4月初め、エンゲルスはバルメンを去ってブリュッセルに住む。「父親との確執その他一身上の理由から、彼はいずれ家を出る心算であったが、弾圧の強化がタイムテーブルを縮めた<sup>59)</sup>」のであった。エンゲルスが郷里バルメン・エルバーフェルトにいたころ、ヘスとともに共産主義宣伝活動に挺身していたが、「この実践運動も一因となって、彼はやがて故郷を離れ」ざるをえなくなってしまう。エンゲルスは要逮捕の注意人物と思われたが、名門エンゲルス家の体面を考慮して、国外追放という条件で、エンゲルスを追放処分にしたものといわれている。

1845年7月中旬から、エンゲルスとマルクスは6週間にわたって、イギリスへの研修旅行 (Studienreise) をおこなっている。この旅行のあと、2人はドイツ哲学の観念論的見解に対する彼らの対立的見解を共同でまとめあげるために——いいかえればヘーゲル以後のドイツ哲学の批判 (Kritik der nachhegelschen deutschen Philosophie) というかたちで、共著の作成にとりかかる。この共同労作の成果 (Das Resultat dieser gemeinsamen Arbeit)こそ『ドイツ・イデオロギー』であった。

この頃、2人は真正社会主義者たち (die wahren Sozialisten) と対決しなければならないことを痛感する。というのは、マルクスにしる、エンゲルスにしる亡命者であったから、ドイツの民主主義的機関誌には、わずかの影響力しかなかった。ところが、1845年以後、フランスやイギリスの義人同盟本部内ですら、真正社会主義的観念が拡まっていて、平和的空想的傾向が同盟内で新しい勢力になりつつあったからである。真正社会主義者とは「彼らは現実 (Wirklichkeit) から出発するかわりに、ある社会の空想的理想像 (das utopische Ideal einer Gesellschaft) をつくりあ

げ、現実をその尺度ではかった。彼らは、政治革命 (politische Revolution) にたいして、平和的な〈人間的〉解放というテーゼ (These von einer friedlichen „menschlichen“ Befreiung) を対置し、社会主義的社会秩序のためのプロレタリアートの革命闘争を拒否し、そのことによってまた、さしあたりドイツで遂行されなければならないブルジョア民主主義的権利と自由 (bürgerlich-demokratische Rechte und Freiheiten) を獲得するための闘争にたいして、否定的態度をとることを正当化<sup>60)</sup> していた人たちであった。「フォイエルバッハのヒューマニズムから出発した『真正』社会主義 (der “wahre” Sozialismus) は……社会主義を感情に溺らせ、愛にすべての政治的・社会的問題を解くべき手段<sup>61)</sup>」を求めていた人たちであり、センチメンタルな宣伝 (sentimentale Propagierung) で「階級平和の観念」 (die Ideen des Klassenfriedens) を訴えていた人たちであり、彼らは、科学的社会主義を敵視して〈人間的な社会主義〉をよびかけ、「社会主義の〈人間化〉 (Vermenschlichung) のスローガン<sup>62)</sup>」を掲げて、社会主義の基礎をとり除こうとしていた人たちでもあった。しかし真正社会主義は「ドイツの民主主義運動によって、なしとげられるべき、あの革命的任務 (jene revolutionären Aufgaben) をもたなかった。その代表者たちは、労働者階級の歴史的役割 (die historische Rolle der Arbeiterklasse) を否認し、労働者のかわりに、インテリを指導的な社会勢力<sup>63)</sup>」とみなしていた。そこで2人は「両人の新しい世界観、つまりプロレタリア世界観の詳しい叙述〈ドイツ哲学とこれまでのドイツ社会主義にたいする論争書〉 (eine polemische Schrift gegen die deutsche Philosophie und gegen den seitherigen deutschen Sozialismus) をさきに出す決心をした。6ヶ月間の共同の仕事の成果が『ドイツ・イデオロギー』という標題をつけた膨大な草稿——哲学のうえで科学的共産主義の根本的基礎をつくりあげた著作 (ein Werk, mit dem in philosophischer Hinsicht wesentliche Grundlagen des wissenschaftlichen Kommunismus)<sup>64)</sup>」となったものである。本書はフ

唯物史観における生の生産および再生産について(中)  
フォイエルバッハ批判を通じて「人間の経済的发展史の歴史的・哲学的解釈の最初の体系的論述」を展開した全体の総括部分と、フォイエルバッハ、シュテイルナーに詳細な批判を加えた第一部、ならびにカール・グリュン (K.Grün) をはじめとする〈真正社会主義〉を批判した第2部から成っている。

いうまでもなく『ドイツ・イデオロギー』は「並はずれて豊かな思想的内容をもった著作」(ein Werk von ausserordentlichem Ideenreichtum)であるばかりか、唯物史観の基本的諸命題 (grundlegende Leitsätze) をふくむ主要な部分は、本書の第1巻、第1章(または第1篇)で仕上げ (ausarbeiten) られている。執筆者は、むしろエンゲルスであり、浄書稿 (Reinschrift) でも下書き稿 (Unrein) (あるいは異稿) においても、エンゲルスの端麗な筆蹟に、マルクスの醜悪な筆蹟による加筆修正、欄外書込み、覚書きがみられる。

しかも、その第1章は——広松氏の詳細な研究の結果によると——その草稿の「エンゲルスの地の文章とマルクスの筆蹟で加筆修正されている文章とを比較分析してみれば、エンゲルスのオリジナリティとこの時点におけるイニシャチーフには疑問の余地がありえない」し「ウアテキストの思想内容はエンゲルスのヘゲモニーによるもの」と断定しようと明言している。当時のマルクスの自己疎外の論理(たとえば経済的自己疎外にしても)は、市民社会の矛盾の解明としては、まことに好都合なものであり、便利重宝であるが、市民社会の〈歴史的経過〉を解明する説明原理とはなりえないことは明らかである。疎外論は歴史観形成には役立たない。『ドイツ・イデオロギー』執筆のための共同討議のうちに、マルクスはその点に気が付く。「そこでマルクスは転機に直面する」ことになるが、激しい討論の結果とはいえ——エンゲルスの先導によって、唯物史観の定礎が据えられていったものであったことはいうまでもない。

- 注 1) Ich erinnere mich gern...Zeitgenossen über Friedrich Engels. Dietz Verlag Berlin, 1970. S.143. 邦訳 129 頁, ◯印引用者。
- 2) ibid., S.149. 邦訳 134 頁, ◯印引用者。
- 3) ibid., S.149. 邦訳 134 頁。◯印引用者。
- 4) ibid., S.65. 邦訳 61 頁, ◯印引用者。
- 5) ibid., S.65. 邦訳 62 頁。
- 6) H.Lefebvre. Le marxisme. Presses Universitaires de France, 1980. p.18. クセジュ文庫 邦訳 25 頁, ◯印引用者。
- 7) 広松渉『マルクス主義の成立過程』昭和 49 年, 至誠堂 132 頁。
- 8) 同書 97 ~ 98 頁, ◯印引用者。
- 9) F. Mehring. Karl Marx. Geschichte seines Lebens. Dietz Verlag Berlin, 1979. S.104. 邦訳 178 頁, ◯印引用者。
- 10) Friedrich Engels. Eine Biographie, Dietz Verlag Berlin, 1970. S.21. ゲムコー編『フリードリヒ・エンゲルス伝記』(上) 土屋, 松本訳, 大月書店, 1972 年, 20 頁, ◯印引用者。
- 11) Engels. Zur Geschichte des Bundes der Kommunisten. M.E.A.S. Bd II. S.319. 『マル・エン 2 巻選集』II, 264 頁。
- 12) Eine Biographie, op. cit., S.64 邦訳前掲 53 頁, ◯印引用者。
- 13) カウツキー『マルクス, エンゲルス評伝』大正 15 年, 同人社 104 頁, ◯印引用者。
- 14) ジョルジュ・ルフラン『現代ヨーロッパ社会思想史』(上) 昭和 51 年 花崎泉平訳, 社会思想社, 122 頁, ◯印引用者。
- 15) Eine Biographie, op. cit., S.65. 邦訳, 前掲 53 頁。
- 16) G. ルフラン, 前掲書, 123 頁
- 17) Eine Biographie, op. cit., S.66. 邦訳, 前掲 54 頁。
- 18) ibid., S.70. 邦訳 57 頁。
- 19) Ich erinnere mich gern...op. cit., S.52. 邦訳 50 頁, ◯印引用者。
- 20) M.E.W. Bd1. S.460. 邦訳 501 頁, ◯印引用者。
- 21) 広松渉『唯物史観の原像』1979 年, 三一書房, 53 頁。
- 22) 細谷昂『マルクス社会理論の研究』1979 年, 東大出版会 137 頁, ◯印引用者。
- 23) Eine Biographie, op. cit., S.80. 邦訳 64 ~ 65 頁。
- 24) E. H. カー『カール・マルクス』石上良平邦訳, 1970 年, 未来社, 56 ~ 57 頁, ◯印引用者。
- 25) 広松渉『唯物史観の原像』前掲書 37 頁。
- 26) 細谷昂『マルクス社会理論の研究』前掲書, 141 頁, ◯印引用者。
- 27) 広松渉『マルクス主義の成立過程』前掲書, 87 頁, ◯印引用者。

唯物史観における生の生産および再生産について(中)

- 28) 広松渉『唯物史観の原像』前掲書, 41頁。
- 29) 広松渉『マルクス主義の成立過程』前掲書, 82頁, ○印引用者。
- 30) J. Lewis. The Life & Teaching of Karl Marx, 1967. Lawrence & Wishart, London, p.54. 邦訳70頁。
- 31) ibid., p.48. 邦訳63頁。
- 32) Eine Biographie, op. cit., S.81. 邦訳, 前掲65～66頁, ○印引用者。
- 33) ibid., S.81. 邦訳65頁。
- 34) E. Mandel. Entstehung und Entwicklung der ökonomischen Lehre von Karl Marx. Europäische Verlagsanstalt, 1975. S.17. マンデル『カール・マルクス』邦訳21頁, 傍点原著者。
- 35) M.E.W. Bd 1.S.592.『マル・エン全集』第1巻, 649頁, ○印引用者。
- 36) 細谷昂, 前掲書, 142頁, ○印引用者。
- 37) 同書142頁, 傍点原著者, ○印引用者。
- 38) 同書143頁, 傍点原著者, ○印引用者。
- 39) 同書148頁
- 40) 広松渉『マルクス主義の成立過程』前掲書40頁。
- 41) 広松渉『エンゲルス論』1968年, 盛田書店226頁, ○印引用者。
- 42) W.Blumenberg. Marx. Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH. Reinbeck bei Hamburg. 1962.S.64. 邦訳80頁, ○印引用者。
- 43) 広松渉『マルクス主義の成立過程』前掲書93頁, ○印引用者。
- 44) Eine Biographie, op. cit., S.95. 邦訳77頁, ○印引用者。
- 45) J. Lewis. The Life & Teaching of Karl Marx op. cit., p.47. 邦訳前掲61頁。
- 46) Eine Biographie, op. cit., S.95. 邦訳77頁。
- 47) 大森義太郎『史的唯物論』前掲書, 56～57頁, 傍点原著者, ○印引用者。
- 48) E.H. カー『カール・マルクス』前掲書, 58頁, ○印引用者。
- 49) M.E.W. Bd II. S.232 邦訳228頁, ○印引用者。
- 50) Eine Biographie, op. cit., S.105. 邦訳前掲85頁, ○印引用者。
- 51) カウツキー『マルクス・エンゲルス評伝』前掲書111頁, 傍点原著者。
- 52) F. Mehring, op. cit., S.116. 邦訳, 前掲155～196頁, ○印引用者。
- 53) Ich erinnere mich gern……op. cit., S.22. 邦訳, 前掲22頁, ○印引用者。
- 54) 細谷昂, 前掲書, 149頁, ○印引用者。
- 55) 同書, 151頁, 傍点原著者, ○印引用者。
- 56) M.E.W. Bd 27. S.11. 『マル・エン全集』第27巻, 10～11頁。
- 57) ibid., S.12. 同上12頁, ○印引用者。

- 58) 広松渉『マルキシズムの成立過程』前掲書 95 頁。
- 59) 同書 96 頁。
- 60) Eine Biographie, op. cit., S.114 邦訳, 前掲 92 頁。
- 61) コルニェ『マルクスと近代思想』青木靖三訳, 1956 年, 法律文化社, 155 ~ 6 頁, ○印引用者。
- 62) Eine Biographie, op. cit., S.114. 邦訳, 前掲 92 頁。
- 63) ibid., S.115 同上 92 頁。
- 64) ibid., S.116. 同上 93 頁, 傍点原著者, ○印引用者。
- 65) 広松渉『エンゲルス論』前掲書, 244 頁, ○印引用者。
- 66) 同書 301 頁。
- 67) 同書 255 頁。

## Ⅱ] 新版『ドイツ・イデオロギー』作製事情

『ドイツ・イデオロギー』がエンゲルスとマルクスのほかモーゼス・ヘス (Hess Moses) とヨゼフ・ワイデマイヤー (Weydemeyer.J) の 4 人の共同討議の所産であることは, まず間違いのないところであろう。このうちヘスとワイデマイヤーの「執筆の段階での参与の意味は, それほど大きいものではなく」(望月氏), 主としてエンゲルスとマルクスが「基本思想の一致を前提に, 対立点をぶつけあい, より高い水準へと止場しながら〈同一の結論〉へとねりあげていったと考えるのが妥当<sup>1)</sup>」なところである。つまり「マルクスの理論的思考とエンゲルスの経験的次元の思考」がひとつの「つぼ」に合流したものが『ドイツ・イデオロギー』であった。のみならず, この全部で 50 ボーゲンにおよぶ分厚い 2 冊 (diese zwei starken Bände von zusammen fünfzig Druckbogen) の執筆の時期についていえば, 1845 年 11 月執筆にとりかかり, 1846 年 4 月には, ほぼ終了したものと推察される。『ドイツ・イデオロギー』は——マルクスが『経済学批判』の序言 (1859 年) で述べている説明によると——「彼 (エンゲルス) が 1845 年の春, おなじように, ブリュッセルにおちついた

唯物史観における生の生産および再生産について(中)

ときに、われわれは、ドイツ哲学の観念論的見解 (die ideologische der deutschen Philosophie) にたいする、われわれの対立的見解 (Gegensatz) を、共同でまとめあげることに、じつはわれわれの以前の哲学的意識 (ehemalige philosophische Gewissen) の決算 (abrechnen) をすることに決心した。この企て (Vorsatz) はヘーゲル以後の哲学の批判 (Kritik der nachhegelschen Philosophie) の形で遂行された。ぶあつな八つ折り版2冊 (zwei starke Oktavbände) からなるその草稿『ドイツ・イデオロギー』をウエストファーレンにある発行所 (Verlagsort im Westfalen) におくってから、かなりたって、われわれは、事情がかわったので出版できない、という通知をうけとった。われわれは、自分の理解をとげるといってわれわれのおもな目的をすでにたっしていただけない、よろこんで、その草稿を鼠のかじる批判 (die nagende Kritik der Mäuse) にゆだねた<sup>2)</sup> ということであった。しかも『ドイツ・イデオロギー』第1巻の刊行の目的は——ヘーゲル新派哲学 (neue junghegelschen Philosophie) [この哲学はドイツにおいて、世間から驚愕と畏怖 (Entsetzen und Ehrfurcht) の念をもって迎えられている] の批判である——すなわち「自分で自分を狼 (Wölfe) と思い、また他からもそう思われつつあるこれら羊ども (Schafe) の正体をあばき、彼らがドイツ市民の諸観念をただ哲学的にまね鳴き (nachblöken) しているだけであること、これらの哲学的解釈者たちの大言壮語 (die Prahlereien dieser philosophischen Ausleger) もただ現実のドイツの状態のみじめさを反映しているだけであることを示すのが目的<sup>3)</sup>」なのだという点にあった。青年ヘーゲル学派の基本思想が局地的な局限性 (lokale Borniertheit) の反映にすぎないことを示すのが目的で、「水に溺れないためには重力の思想」を頭のなかから除去すればいいと考えている空論的思想を批判するのが目的であった。つまり『ドイツ・イデオロギー』は「それ以前の経済学研究をふまえて、当時のドイツ的イデオロギー批判」として書かれたものであり、しかもそのなかで、唯物史観の基礎づ

けがなされていったものと考えられうる。

周知のように『ドイツ・イデオロギー』は「並みはずれて豊かな思想内容をもった著作」である。しかも『ドイツ・イデオロギー』のなかで主要な地位をもつ〈唯物史観の仕上げ〉(die Ausarbeitung der historischen Materialismus)は、この第1章で詳述されている。しかも、第1巻、第1章の原稿は主として、エンゲルスの筆蹟で書かれた5つの構成部分からなっている。ゲ・ア・バガトゥーリヤは「マルクス主義の歴史という見地から、および史的唯物論(唯物史観)の見地から『ドイツ・イデオロギー』第1章はいちぢるしく関心をひくものである。そのことは、なによりもまず『ドイツ・イデオロギー』全般の価値にもとづくが、とりわけ、その第1章の重要性によって規定<sup>4)</sup>されるものであると強調している。というのは、この第1章が『ドイツ・イデオロギー』のなかで「仕上げられた唯物論的歴史観〔=唯物史観〕の諸命題の大部分をふくんでいる〔のみならず〕、『ドイツ・イデオロギー』において展開された、すべての原理的諸命題は、この第1章で、すでに定式化されている。つまり、ここにすべての仕事の主要な積極的内容が凝縮されている<sup>5)</sup>」と考えられるからである。じじつ『ドイツ・イデオロギー』とくに、その第1章「フォイエルバッハ」ほど「マルクス主義の教義論証のために便利であった作品はほかにない。ここには、そのどれをとっても、そのまま〈唯物論的歴史観〉(=唯物史観)の基本命題を明示するような概念や文章やパラグラフが充満<sup>6)</sup>」している。また『ドイツ・イデオロギー』において、「実質的に、唯物論的歴史観(=唯物史観)の形成過程は終了<sup>7)</sup>」している。つまり『ドイツ・イデオロギー』において「マルクスとエンゲルスは唯物論的歴史観を、すなわち史的唯物論(=唯物史観)を、はじめて全面的に仕上げた。このことは、生産諸力と生産関係の弁証法の発見によって可能となった<sup>8)</sup>」ものであって、ここで彼らは始めて「生産諸力と生産関係の発展の弁証法を解明し、〔かつ〕定式化しえた」のである。



唯物史観における生の生産および再生産について(中)

マルクスやエンゲルスの生前には公刊されないままで終わった『ドイツ・イデオロギー』の「<sup>(おのおの)</sup>膨大な草稿は、各々3篇からなる2巻本の構成を示しているが、第1巻、第1篇〈フョイエルバッハ、唯物論的な観方と観念論的な観方との対立〉(1. Feuerbach. Gegensatz von materialistischer und idealistischer Anschauung)に積極的な立論が集中的に表現されている。ところが、旧来の公認の底本では、ほかならぬ、この第1篇〔=章〕の原稿に暴力的な編輯の手が加えられていたため——このことは最近モスクワのインスティテュートによって公式に確認された——さまざまな誤った理解を生んできた。また、マルクス主義の形成に際して、エンゲルスの果たした役割が誤って評価される因になった……この第1篇の原稿は、(1)大小2つの束からなる。(2)そのうち大きい束は Urtext である。しかも、それは、第2篇〈聖ブルーノ Sankt Bruno〉、第3篇〈聖マックス Sankt Max〉<sup>。 。 。 。 。 。 。 。 。 。</sup>といった篇別構成が確立する以前の膨大な原稿から<sup>。 。 。</sup>撰り残されたものである。(3)このウアテキストの執筆者はエンゲルスであり、極めて多くの抹殺、修正、加筆がおこなわれている。(4)そのうえマルクスによる補筆、修正、欄外書込みも相当の量にのぼる。

エンゲルスの文章とマルクスの修正・加筆した文章とを比較してみると、<sup>。 。 。 。 。 。 。 。 。 。</sup>両人の見解には、まだ相当の距たりが見られる。ありていに言えば、マルクスの方がいかに甚しく立後れていたか、また唯物史観は主として<sup>。 。 。 。 。 。 。 。 。 。</sup>専らエンゲルスの創見によるものであって、マルクスはむしろ<sup>。 。 。</sup>エンゲルスに<sup>。 。 。</sup>学んだのだ、ということ、これが<sup>(わか)9)</sup>判る」と広松氏はいいい切っている。つまり広松氏が両者の見解の相違を文章から比較しただけでも、マルクスの<sup>。 。 。 。 。 。 。 。 。 。</sup>立ち遅れは余りにもハッキリしているので——唯物史観はもっぱらエンゲルスが考え出したものに違いないという。この『ドイツ・イデオロギー』は従来、<sup>。 。 。 。 。 。 。 。 。 。</sup>マルクスが主導してきたように誤って伝えられているものなのだが——その誤解の「主なる原因は、エンゲルス晩年の謙抑な〈証言〉を人びとが額面通りに受取ったことにある。ところが、45、46年当時に

書かれた両人の論文、ノート、書簡さらには『ドイツ・イデオロギー』の手稿、等々の研究が進むにつれて、数々の反証があがるに至っており、エンゲルスの証言はとうてい額面通りに受取ることはできない〔ということがわかってきた〕。そもそもエンゲルスは、マルクスがまだ共産主義に対して批判的な態度をとっていた43年以來、すでに共産主義者として論陣を張っており、そのうえ唯物史観のモチーフをマルクスに先立って、つかんでいたことが当時の論稿から窺われる。経済学研究の先鞭をつけたという点は措くとして、共産主義理論と唯物史観のいずれの方面においても、少くとも当初の間は、エンゲルスの方が先行し、かつ先導したというこ<sup>10)</sup>と」はすでに前節で確認したとおりである。

若き日のエンゲルスとマルクス、ワイデマイヤーとモーゼス・ヘスの協力で書き残していった『ドイツ・イデオロギー』は、原稿がほぼ完成された時点で出版契約の方が破棄されてしまったから、80年以上も埋もれたままになってしまっていたが、この『ドイツ・イデオロギー』は、前記のとおり「唯物史観を確立した記念碑的な文書である。ところが1932年、スターリン時代に、はじめて“公表”された、この遺稿の底本 MEGA 1. Abt. 5. Bd. (Marx-Engels Gesamtausgabe Abt. 1. Bd. 5) は手稿を甚しく誣<sup>(し)</sup>めるものであって、極言すれば“偽書に等しいもの”になりおわっていた。この事実は、一部識者の間では夙<sup>つと</sup>に知られていたはずであるが、スターリン時代の終熄10年にして昨今ようやく手稿の原型を回復する運びとなってきた〔ものである〕。1965年秋のソ連版に続いて、さらに改善を加えたドイツ語版が1966年の秋、東ドイツで発表された。これら2つの新版は、成程〈旧版を典拠とした従来のマルクス《解釈》を根底から覆<sup>す</sup>〉もの<sup>11)</sup>といえるくらい変容を示しているものである。

『ドイツ・イデオロギー』という遺稿は「2巻用6篇（見方によっては7篇）の草稿から成っている。その第1篇が〈1. フォイエルバッハ、唯物論的な観方と観念論的な観方との対立〉である。この第1篇は——逐条

的な批判を内実とする他の諸篇とは異って——原著者たちが、ここで積極的に自説を展開しており、膨大な遺稿の白眉ともいべき部分である。ところが晩年のエンゲルスも確認している通り、肝心なこの篇は未定稿のままである。このため、他の5篇の清書稿とは異って、特に第1篇の処理が問題になる。諸版の異同を生ずるのも、専ら、この篇に関してである……問題の草稿は、ひと続きの書き下ろしではなく、第(1)に、新旧いくつかの層から成り、その1部は下書き、異稿、改訂稿、浄書稿といった内的対応関係をもっており、……基本執筆者エンゲルスの文章に、マルクスが抹殺・修正・加筆を施しており、それをさらにエンゲルスが補修している。のみならず、多くの欄外書き込みや符牒があり、改稿のためのメモもついている<sup>12)</sup>という状態なのである。結局のところ、断定的にいえることは——広松氏によると「現行版『ドイツ・イデオロギー』は事実上、偽書に等しい。この事実は、マルクス・エンゲルスの著作のなかで『ドイツ・イデオロギー』が占めている特異な地位と比重とを考えると、由々しい問題だといわねばなるまい。現に、本書を典拠とした、いくつかのマルクス解釈は、「偽書」の批判とともに、根底から、ついえざるをえないはずである。周知の通り、膨大な草稿『ドイツ・イデオロギー』はマルクス・エンゲルスの生前には公刊されなかった。それは80年間も埋れていたのち、1926年に至って、ようやく一部分が公表されたが、全文が公表されたのは何と1932年を迎えてからであった。前者がいわゆるリヤザノフ版であり、後者が現行諸版の底本となっている、いわゆるアドラツキー版である。ところが、スターリン時代に現われた、この底本こそが、実は途方もない代物なのである。この間の事情を識るためには、予め2つの神話を払拭しておかねばならない。(1) 原稿は未完成であったこと。人は<sup>しばしば</sup>屢屢、『経済学批判』序文を粗忽に理解して、原稿が完成したものと思い込んでいる。しかし、6篇からなる2巻を予定されていた膨大な原稿のうち、相当部分が出版社に送られて鼠牙の批判に委ねられたとはいえ、唯物史観の

定式化、その他、もっとも重要な内容を含む第1篇、つまり〈1. フォイエルバッハ。唯物論的な観方と観念論的な観方との対立〉という標題のついた部分は未完成のままであった。(2) 執筆者は主としてエンゲルスであること。人はしばしば、『ドイツ・イデオロギー』は主として、マルクスの筆になるものと思い込んで〔いるが〕……草稿を執筆したのが殆んどエンゲルスであることは銘記されねばならない。もとより、エンゲルスは単に清書しただけだ、と考えることも出来よう。しかし後に示す通り、少くとも上述の第1篇に関する限り、エンゲルスのオリジナルだと判断すべきである。右の(1)から、差し当って問題になるのが第1篇の編輯である……第1篇の原稿は未完成であるため、しかるべく整理を要する。ここにおいて、リヤザノフは、いわば写真にとるような具合に、原稿を順次活字に移した。これにひきかえ、アドラツキー版では、草稿を一旦バラバラに切りきざんだうえで、いわば糊と鋏でつぎはぎしている。その結果、両版の間には、同じ草〔手〕稿をもとにしたとは思えないほどの甚しい相違が生ずることになった。アドラツキー版でのつぎはぎたるや、パラグラフ単位での配列がえといったものではなく、一つのパラグラフをすら切りきざみ、それを全然別個の文脈で書かれた、草稿では数十頁もへだたっている文章の一部と結びつけて新規にパラグラフを作り上げるといった大胆極りのないものである。しかも、ご丁寧なことには、原稿の文章どうしのつぎはぎでは、どうにもならない場合など、勝手につなぎの言葉を挿入している！敢て読者の注意を喚起しておきたいのであるが、原稿は一息に書かれたものではなく、いくつかの層からなっており、旧いものと新しいものとは1年もの距たりがある。しかも、この1年、1845～46年といえ、マルクス、エンゲルスが急速にヘーゲル左派の残渣を克服して、新しい思想の形成を進めていた時期にあたっており、従って原稿の内容は時として前後あい矛盾している。そのうえ、両人の見解はまだ完全に一致しているわけではない。そこへもってきて、エンゲルスの原稿にマルクスが加筆修正

唯物史観における生の生産および再生産について(中)

しているだけでなく、欄外に覚書き風の書き込みなども記入している。このような断片的な欄外書き込みの文章を含めて、原稿の新旧層の別を顧慮せず、つぎはぎを強行し、甚しきに至っては、つなぎの言葉を挿入して編輯の手を加えるとき、素材がいかにか手〔草〕稿からの取捨選択されたものであっても、偽書に等しいものが現出しかねないことは、万人の危懼するところであろう。現にそれが現実となっているのである。……リヤザノフとアドラツキー版の編輯者P. ウエーラーは、この素材をもとにして、換骨奪胎的な再構成に腐心することになった<sup>13)</sup>からである。もう一つ、肝心な点は「長いあいだ、最初の校訂者リヤザノフ以来の〈マルクス口述・エンゲルス筆記〉説という、一見両者一体説のごとくながら、実は独自に巨人的な思想家エンゲルスをまるで小心な一筆稿者にしたて上げている定説のまえに、おしつぶされてきた違和感」について述べておく必要がある。この違和感こそが、マルクスとエンゲルスの「両者をともに自縛してきたマルクス無謬、生涯一貫、マルクス、エンゲルス一体等々の神話<sup>14)</sup>」に由来している。

たしかに『ドイツ・イデオロギー』の原稿が「エンゲルスの筆蹟で書かれていること、しかも唯物史観と共産主義理論が、そこに、ほぼ完成した形で論述されていること」——この点だけから考えれば——筆蹟はエンゲルスにしる、ほんとうはマルクスの口述筆記であろうと推察するのは、無理からぬことかも知れない。しかしこの推察は事実と反している。広松氏はハッキリと「マルクスは口述筆記で文章を書かせるほど『小器用』ではなかった。(さもないれば『資本論』は夙うに出来あがっていたであろう!) 一般に高度の理論的著作の口述は——伝記的懐旧談のごときとは異り——困難である。いわんや〈新しい世界観の天才的萌芽〉をようやくつかんだ時点で、論点を整理したメモもないままに、理論的労作を口述筆記させることなど、よほどの『器用人』にも出来ない相談であろう。しかも45年当時、エンゲルスは決してマルクスの『弟子』ではなかった。夫人

やワイデマイヤーに口述したというのならともかく、また、手を入れただけで決定稿になるというのであればともかく——もう一度浄書を要するような下書きをエンゲルスに筆記させるというのがごときことは、いかに〈非常識〉なマルクス(?)といえどもなしえなかったであろう<sup>15)</sup>と断言している。つまり「マルクス口述、エンゲルス筆記」説は「ありえない」ものと断定しうる。

ところで、新版『ドイツ・イデオロギー』作製事情について述べておかなければならないことは——編集者ゲ・ア・バガトゥーリヤの解説によると「第1の版(1924～1926)は、今日では純粋に、歴史的な意味しかもっていない。1932～1933年の版でとられた第1章の資料の配置と区分は、もっとも普及されたものであるが、現在では、それらは満足なものとは認めがたい。この第2の版を準備した人びとは、マルクスとエンゲルスの未完成の原稿を、それがわが手にはいったままの姿で印刷するのは不適當であること、また著者たちの欄外書込みが原稿の仕上げのための必要かつ十分な指示を与えているという立場に立っていた。これに応じて、第1章のテキストは約40の断片に区分され、それらの相互の配置は変更された。そして欄外の書込みは表題と解釈された。さらに、いくつかの場合には、架空のものにさえ、かえられている。[だから]、編集者の表題のつけかたは、原稿の構造と内容にふさわしいものではない<sup>16)</sup>と述べている。(広松氏が現行版偽書説を述べている理由はここにある)だから「在来のどの版も……この著作の内容と意義とが十分に理解されたとはいいがたい」ものであったわけで、ここに新版『ドイツ・イデオロギー』作製の必要があった。草稿の「その構造と内容の研究がすすむにつれて、いままでの版の批判的改訂をおこなうこと、そして旧版のすべての成果を汲みとると同時に、その本質的な諸欠陥を取りのぞいた新版を準備することが可能となった。今日、ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所によってなされた『ドイツ・イデオロギー』第1章の新版は、テキストの完

唯物史観における生の生産および再生産について(中)

全さにおいて、翻訳の正確さにおいて、マルクスとエンゲルスの原稿のもっとも妥当な表現<sup>17)</sup>」であって「従来のすべての版と違って、テキストのあたらしい配列と区分をおこなっている点で特色をもっているのみならず、新版は『ドイツ・イデオロギー』のゆたかな内容の研究をいちぢるしく容易にし、あらたに、より深く、唯物論的歴史観を把握することを可能にし、また、その形成のもっとも重要な段階における唯物論的歴史観の基本的諸命題の発展を跡づけることを可能にしている<sup>18)</sup>」ものといえよう。広松氏も新版『ドイツ・イデオロギー』は——十分なものとはいわないにしろ——「これまで絶対的な底本として通用してきたアドラツキー版の『偽書的な作意』を暴露し、原典解釈の新生面<sup>ひら</sup>を拓いたことには、歴史的な意義を認めうる。また、判読を正し、新発見を追補したことも<sup>19)</sup>」たしかに改善といわざるをえないという。つまり、新版『ドイツ・イデオロギー』は現行版の『偽書』的著作から「原典解釈の新生面<sup>ひら</sup>を拓いた」著作に改善された著作であることは事実である。

マルクスとエンゲルスが『ドイツ・イデオロギー』(第1巻)を1845年11月に書き始め、46年4月に、だいたい仕上げ、原稿への手入れは46年8月まで続けられたものと推定される。したがって「この時期のマルクスとエンゲルスの見解の発展の動態(ダイナミカ)は『ドイツ・イデオロギー』の原稿に、それを構成する諸部分の成熟度にとうぜん反映<sup>20)</sup>されている」とみなければならない。とすれば、すでにエンゲルスの先導性および先行性を確認しえた以上——「生の生産および再生産」の叙述にあたって、新版『ドイツ・イデオロギー』では、いかに両者の歴史的見解の発展の動態(ダイナミカ)を示しながら描かれているものなのか。広松氏の新編集本(ドイツ語版)およびソ連新版(花崎泉平氏訳)では「生の生産および再生産」の問題をいかに取扱っているか。次号で、その点について検討してみよう。

- 注 1) 細谷 昂『マルクス社会理論の研究』前掲書, 111 ~ 112 頁。
- 2) Marx. Zur Kritik der politischen Ökonomie (Vorwort), M.E.A.S. S.339. 『マル・エン2巻選集』第1巻208頁, 傍点原著者, ◯印引用者。
- 3) M.E.W. Bd. 3. S.13. 『全集』第3巻, 11頁, 傍点原著者。
- 4) ゲ・ア・バガトゥーリヤ「K. マルクスとF. エンゲルスの『ドイツ・イデオロギー』第1章原稿の構造」(新版『ドイツ・イデオロギー』花崎泉平訳, 1980年, 合同出版, 189頁, 所収) ◯印引用者。
- 5) 同書, 192頁, ◯印引用者。
- 6) 望月清司『マルクス歴史理論の研究』前掲書, 156 ~ 157頁, ◯印引用者。
- 7) ゲ・ア・バガトゥーリヤ, 前掲書, 191頁。
- 8) 同書, 190頁, ◯印引用者。
- 9) 広松 渉『マルクス主義の成立過程』前掲書, 97 ~ 98頁, 傍点原著者, ◯印引用者。
- 10) 同書, 122頁, ◯印引用者。
- 11) 同書, 126頁, ◯印引用者。
- 12) 同書, 127 ~ 128頁, ◯印引用者。
- 13) 同書, 148 ~ 150頁, 傍点原著者, ◯印引用者。
- 14) 望月清司『マルクス歴史理論の研究』前掲書, 162頁。
- 15) 広松 渉『マルクス主義の成立過程』前掲書, 119頁, ◯印引用者。
- 16) ゲ・ア・バガトゥーリヤ, 前掲書, 193頁, ◯印引用者。
- 17) 同書, 193 ~ 194頁, ◯印引用者。
- 18) 新版『ドイツ・イデオロギー』序文, 花崎泉平訳, 1980年, 合同出版, 18頁。
- 19) 広松 渉『マルクス主義の成立過程』前掲書137頁。
- 20) ゲ・ア・バガトゥーリヤ, 前掲書195頁, ◯印引用者。